

深田久弥と百名山

西 軽海町 山 勝 三

日本百名山とは

世はまさに「日本百名山」ブーム。折からの健康志向ブームも相まって、中高年を中心に夏山シーズン中の各地の日本百名山周辺は、中高年の登山者で賑わっている。

ここに取り上げる『日本百名山』は、地元、加賀市出身の作家、深田久弥の著した山岳随筆集である。初刊は昭和三十九年七月に新潮社から出版され、第十六回読売文学賞（評論・伝記）を受賞した。

本著は深田が、実際に登頂した日本の各地の山から自身が定めた基準で、百座を選び主題とした随筆集で、日本の名峰各座が一座ごと二千字程度に巧みにまとめられている。山の地誌、歴史、文化史、文学史、山容に関する研究書であり、山格を論じたものであり、登頂にいたる過程の随想であって、いわゆる紀行文集とは異なる。

受賞時の読売文学賞選定委員で、東大時代の学友として深田に誘われ、数多くの山行を共に経験した日本の評論家の第一人者、小林秀雄は、その推薦理由を次のように述べている。

「評論の部では私は深田久弥氏の『日本百名山』を推した。これは近ごろ最も独特な批評文学と考えたからである。批評の対象が山であるという点が、たいへんおもしろいのである。著者は、山を人間とみなして書いていると云っていいのだが、山が人間なみに扱えるようになるのには、どれほど深山の山々と実地につき合ってみなければならなかつたらう。著者は、人に人格があるように、山には山格があるといっている。山格について一応自信ある批評的言辞を得るのに、著者は五十年の経験を要した。文章の秀逸は、そこから来ている。私に山の美しさを教えたのは著者であった。二人で谷川岳に登ったのは昭和八年であった。憶えば古い話だが、そのころから著者の仕事は、もう始まっていたのであ

る。自分の推薦に対しほとんど全委員の賛同を得て、わが事のよ
うに嬉しかった事を、憚りながら付記して置きたい」

|| 読売新聞掲載、昭和四十年二月二日付《原文》 ||

深田久弥の日本百名山選定基準

深田は日本百名山の選定基準として、日本の多くの山を踏破し
た経験から、「山格・歴史・個性」を兼ね備え、かつ原則として
標高千五百メートル以上の山という基準を設けた。

①山の品格

人には人格があるように、山には「山格」のようなものがある
とし、誰が見ても立派な山だと感嘆することを、第一の基準とし
た。

②山の歴史

昔から人間との関わりが深く、崇拜され山頂に祠が祀られてい
るといふような山の歴史を尊重し、第二の基準とした。

③個性のある山

芸術作品と同様に、山容・現象・伝統など他には無いような顕
著な個性をもっていることを、第三の基準とした。

『日本百名山』著作の背景

深田は戦前には、日本のめばしい山にほとんど登っており、そ
の中から百名山を選ぶという構想を持っていた。全国八十八座の
山を書写した江戸後期の風景画家、谷文晁の「日本名山図会」を
念頭に置いたともいわれる。

昭和三十四年三月から、朋文堂の登山誌『山と高原』で毎月二
座の日本百名山の連載が始まった。山の地誌・歴史、文化史、文
学史、山容、自身の登頂記などを二千字程度に簡潔にまとめ、
五十回連続して昭和三十八年四月号まで連続して書き継がれた。

連載は登山の愛好者から好評を得て、一年余りの推敲が重ねら
れ、地図と写真が追加されて、昭和三十九年に新潮社から『日本
百名山』として出版された。出版後、登山愛好者だけでなく一般
読者からも好評を得て、版を重ねた。

深田は『日本百名山』の出版後も相変わらず山に登り続けて、
新たに百名山に入りたいと思ういくつかの山を知った。昭和
四十六年に出版された山岳紀行エッセイ集『山頂の憩い―日本百
名山その後』では、その対象として二十座程が紹介された。しか
し、初版本の出版後に百座の差し替えが行われることはなかつ
た。昭和四十六年三月、山梨県の茅ヶ岳に登山中、脳卒中で急逝
した。

日本百名山ブーム

『日本百名山』は紀行文集でも案内書でもまして登山入門書で
もないが、この本を通じて、今まで知らなかった日本の山々の魅
力を知り、自分もこれらの山に登ってみようという人たちによつ
て「日本百名山ブーム」が起き、現在も継続している。百座のう
ち自分がいくつ登ったか増えていくのを楽しみにしている読者も
多い。

平成六年から翌年にかけてNHKのテレビ番組で、『日本百名
山』が映像と深田の文章の朗読を交えて全山が紹介された。また、
NHKで引き続き平成七年に趣味百科『中高年のための登山学』
が、平成九年にその続編として、趣味悠々『中高年のための登山
入門―日本百名山をめざす』が放映され、中高年登山者を中心に、
さらにブームを拡大する契機となった。

その後、この百名山ブームを受け、平成十四年からNHKのテ
レビ番組『つばね百名山』で、日本百名山の登山を主題とする
紀行番組が放映され、その続編や関連番組が、令和に至った現在

まで続き、登山愛好者だけでなく一般の視聴者からも人気をえている。

それぞれの日本百名山

深田は「自分の選定の試みは、旅行業界が観光振興のために選んだ『名勝百選』のようなものに比べれば正確だ」と自負する一方、自分の基準が唯一の妥当な選定基準ではないことも認めている。重版が続いた新潮文庫版の『日本百名山』では解説者の串田孫一が、「読者が自分で百名山を選定する際のたき台として使えることもこの本の魅力」という意見を述べている。

日本百名山リストと筆者の考察

(山名上の数字は1〜1000の通し番号)

北海道地方

- ①利尻山(1718m) ②羅臼岳(1661m) ③斜里岳(1545m) ④阿寒岳(1503m) ⑤大雪山(旭岳)(2290m) ⑥トムラウシ(2141m) ⑦十勝岳(2077m) ⑧幌尻岳(2053m) ⑨羊蹄山(1893m)

【深田】北海道では九座を選定した。他にウペペサンケ山、ニペツ山、石狩岳、ペテガリ岳、芦別岳、駒ヶ岳、樽前山などとも有力な候補としていたが、登頂していないことにより除外した。

【評】北の大地の山々はそれだけで十分魅力的だ。はるか北陸から何度出掛けたことか。有力候補として挙げた山のうち石狩岳、芦別岳、駒ヶ岳、樽前山の他、天塩岳、暑寒別岳などに登ったが、選定された九座に勝る山はなかった。あえて選べば石狩岳だが代わりに落とすべき山が見当たらない。

東北地方

- ⑩岩木山(1625m) ⑪八甲田山(1585m) ⑫八幡平

- (1614m) ⑬岩手山(2041m) ⑭早池峰山(1914m) ⑮鳥海山(2237m) ⑯月山(1980m) ⑰朝日岳(1870m) ⑱蔵王山(1841m) ⑲飯豊山(2128m) ⑳吾妻山(2035m) ㉑安達太良山(1700m) ㉒磐梯山(1816m) ㉓会津駒ヶ岳(2133m)

【深田】東北地方では十四座を選定し、秋田駒ヶ岳と栗駒山を候補とした。他に森吉山、姫神山、船形山があげられた。

【評】候補となった秋田駒ヶ岳と栗駒山はどちらも名峰で、深田は選定に迷ったことだろう。他に森吉山、焼石岳も捨てがたい。選定十四座のうち、⑫八幡平は散策するに素晴らしい高原だが、バス終点から二十分程度で登頂でき物足りない。宮城県代表として深田が候補とした栗駒山と差替えたい。

上信越地方

- ㉔那須岳(1917m) ㉕越後駒ヶ岳(2003m) ㉖平ヶ岳(2141m) ㉗巻機山(1967m) ㉘燧ヶ岳(2356m) ㉙至仏山(2228m) ㉚谷川岳(1977m) ㉛雨飾山(1963m) ㉜苗場山(2145m) ㉝妙高山(2454m) ㉞火打山(2462m) ㉟高妻山(2353m)

【深田】上信越地方では十二座を選定したが、最も選定に迷った地域だった。他に女峰山、仙ノ倉山、黒姫山、飯縄山、守門岳、荒沢岳、白砂山、鳥甲山、岩菅山など候補が目白押し。

【評】上信越地方には様々な名峰が目白押しで、深田も選定に迷った事だろう。候補となった九座にはすべて登頂したが、女峰山、白妙山、鳥甲山が印象に残った。選定十二座のうち火打山は妙高山域の一部であり妙高山に統一して、鳥甲山と入れ替えたい。

関東地方

- ㊳男体山(2486m) ㊴日光白根山(2578m) ㊵皇海山(2144m) ㊶武尊山(2158m) ㊷赤城山(1828m)

④草津白根山(2171m) ④②四阿山(2354m) ④③浅間山(2568m) ④④筑波山(877m)

【深田】関東地方では十二座を迷いなく選定した。

【評】この地域も広い。他に榛名山、妙義山、荒船山、武甲山などに登った。選定十二座のうち、草津白根山は観光地化し過ぎ背広、スカート族が独占。もはや登山の対象とはなり難い。代わりに標高に不満があるが妙義山を入れた。筑波山は百名山中、最も低く千米に満たないが、関東の住まいする人にとって、広大な関東平野の彼方に聳えるその姿は守護神のようなもので外せない。

北アルプス

④⑤白馬岳(2932m) ④⑥五竜岳(2814m) ④⑦鹿島槍岳(2889m) ④⑧劔岳(2999m) ④⑨立山(3015m) ⑤⑩薬師岳(2926m) ⑤⑪黒部五郎岳(2840m) ⑤⑫水晶岳(2986m) ⑤⑬鷲羽岳(2924m) ⑤⑭槍ヶ岳(3180m) ⑤⑮穂高岳(3190m) ⑤⑯常念岳(2857m) ⑤⑰笠ヶ岳(2898m) ⑤⑱焼岳(2454m) ⑤⑲乗鞍岳(3026m) ⑥⑰御嶽(3067m) 【深田】乗鞍、御嶽を含め、北アルプスから十六座を選定した。他に霞沢岳を入れたかったが未踏のため断念した。雪倉岳、奥大日岳、針ノ木岳、蓮華岳、燕岳、大天井岳、有明山、餓鬼岳、毛勝山も候補としたが落選させた。

【評】山好きにとって憧れの北アルプス。筆者も夜行列車に乗って目的の駅のベンチで仮眠。始発のバスに揺られて眠い目をこすり、セッセと何度通ったことか。今は苦しくも楽しい青春の思い出だ。

深田が候補とした山にはすべて登ったが、選定十六座に勝る山はなかった。深田の時代、登山路が無く断念したといわれる霞沢岳にも登った。景観の素晴らしい山だったが、入れ替える山がな

い。

中信、秩父、富士周辺

⑥①美ヶ原(2034m) ⑥②霧ヶ峰(1925m) ⑥③蓼科山(2531m) ⑥④八ヶ岳(2899m) ⑥⑤両神山(1723m) ⑥⑥雲取山(2017m) ⑥⑦甲武信岳(2475m) ⑥⑧金峰山(2599m) ⑥⑨瑞牆山(2230m) ⑦⑩大菩薩嶺(2057m) ⑦⑪丹沢山(1673m) ⑦⑫富士山(3776m) ⑦⑬天城山(1406m)

【深田】中信、秩父、富士周辺から十三座を選定した。

【評】選定した十三座のうち、霧ヶ峰、美ヶ原は山頂近くを観光道路が走り、登山の対象としては物足りない。特に美ヶ原には頂上にホテルがあり歩かなくても登れる。どちらかに入れ替えるとなれば高原と岩場がミックスした乾徳山を選ぶ。高さも申し分ないし、富士の展望台としても素晴らしい山だ。富士周辺にも三ツ峠山、愛鷹山、御正体山など名山があるが、いずれもスケールが小さい。

中央アルプス、南アルプス

⑦⑭木曾駒ヶ岳(2956m) ⑦⑮空木岳(2864m) ⑦⑯恵那山(2191m) ⑦⑰甲斐駒ヶ岳(2967m) ⑦⑱仙丈ヶ岳(3033m) ⑦⑲鳳凰山(2841m) ⑧⑰北岳(3193m) ⑧⑱間ノ岳(3190m) ⑧⑲塩見岳(3047m) ⑧⑳荒川岳(3141m) ⑧㉑赤石岳(3121m) ⑧㉒聖岳(3013m) ⑧㉓光岳(2592m)

【深田】中央アルプス、南アルプスから十三座を選定した。南アルプスでは他に大無間山、笹ヶ岳、七面山なども候補としていた。

【評】筆者が一番好きな山域は南アルプス。北アルプスのような華やかさはないが、静かですっきりとした登山が楽しめる。三千米峰がズラリと並ぶのは壮観だ。選定された十三座のうち広大な中央アルプスが二座では寂しい。南駒ヶ岳か越百山を追加したいが

代わりに落とすべき山がない。あえて挙げれば恵那山か。南アルプスでは間ノ岳をどうするか。高さは堂々の日本第三位だが北岳に近過ぎ、まとめて一つにするという手もある。代わりに落選した唯一の三千米峰、農鳥岳を選ぶか。深田が候補とした三座のうち、大間間山、策ヶ岳は山が深過ぎ一般的でない。山中で様々な宗教体験が出来る信仰の山、七面山が面白いが、代わりに落とすべき山がない。

北陸、関西地方

⑧7 白山(2702m) ⑧8 荒島岳(1523m) ⑧9 伊吹山(1377m) ⑨0 大台ヶ原(1695m) ⑨1 大峰山(1915m)

【深田】北陸、関西地方から六座を選定した。北陸地方では、策ヶ岳と大笠山をいれるべきと考えていたが、登頂していなかったため除外した。自身の出身地では、荒島岳と能郷白山から前者を選択した。関西地方では、藤原岳と比良山は標高が低いため除外し、御在所岳は山頂が遊園地化し世俗化していたためこれも除外した。

【評】登頂していないことを理由に、白山系の策ヶ岳が除外された。登って見ると素晴らしい山だが夏道が無いのが致命的。限られたベテランしか登れない。大笠山は平凡。地元の荒島岳は深田も語っているが、身量肩が過ぎる。どうしてもというなら能郷白山か。大台ヶ原は奈良県側の表からバスや車で簡単に登れ、観光地化しているが、裏の三重県側の谷は見事なスケールで捨てがたい。

中国、四国、九州地方

⑨2 大山(1729m) ⑨3 剣山(1955m) ⑨4 石鎚山(1982m) ⑨5 九重山(1791m) ⑨6 祖母山(1756m) ⑨7 阿蘇山(1592m) ⑨8 霧島山(1700m) ⑨9 開聞岳(924m) ⑩0 宮之浦岳(1936m)

【深田】中国、四国、九州から九座を選定した。

中国地方では氷ノ山を次の候補としていたが、鳥取県の大山一座のみの選定に至った。他に蒜山や三瓶山などならかな山が多く物足りなかった。四国では迷うことなく、石鎚山と剣山を選定した。九州では由布岳、市房山、桜島も候補となっていた。

【評】広い中国地方が大山のみでは寂しい。しかし、氷ノ山を追加したいがスケールが余りに小さい。蒜山、三瓶山は論外。四国では剣、石鎚の二横綱にかなう山がない。九州では市房山を入れたいが代わりがない。あえて候補を挙げれば背の低い開聞岳だろうが、日本列島の南の関門として海上からスツクと立ち上がった凛々しさは捨てがたい。桜島は登る山ではなく、薩摩のシンボルとして麓から眺める山だ。

筆者の日本百名山

深田は「山格・歴史・個性」を兼ね備え、かつ原則として標高千五百メートル以上の山という基準を設け、日本列島の山々を歩き、登り、彼の『日本百名山』を選定し、世に問うた。

筆者は深田が選定した『日本百名山』を限なく何度も登り返し、候補とした山、登山が叶わず断念した山もほとんど登った。その結果、深田の選定の巧みさ、完璧さ、公平さには脱帽するしかない。深田が「日本百名山」を選んだ後、日本山岳会などが後追いの形で「日本二百名山」「日本三百名山」を選び公表したが、いずれも深田の「日本百名山」がトップ100を占めている。

筆者は中学時代に登頂した白山で登山の醍醐味を知り、爾来、八十歳の今日に至るまで七十年近く、春夏秋冬、連綿として日本列島の山々に登り続けて来た。この間、地元の名山、白山を百回以上登頂したのを始め、深田の選定した日本百名山は全山、コースを変え、季節を変え、仲間を変え、当然のこと年齢も必然的に

変えて複数回登って来た。他の日本の山々もその一山一山を熟知している。

そこで最後に、筆者は串田孫一の意見にしたがい、深田日本百名山をたたき台として自らの日本百名山選定を試みた。その結果は地域別の考察として前述したが、結論として、深田の選んだ日本百名山から次の山々を当選、落選させ、筆者の日本百名山を選定した。読者のご意見はいかがだろうか。

当選 栗駒山、烏甲山、農鳥岳、妙義山、乾徳山、能郷白山を追加。

落選 八幡平、火打山、草津白根山、美ヶ原、間ノ岳、荒島岳を削除。

深田の終焉の山、山梨県の茅ヶ岳山麓に造られた深田記念公園には彼の文学碑があり、周囲の山々を背に次の文字が刻まれている。

百の頂に百の喜びあり

